



原田牧場 Note

page 11

11月で結婚生活まる16年が終わり、17年目がスタートしました。キリがいい年でもないですが、夫婦のことを語ろうと思います。夫婦の話となるとちょっと変わったことやびっくりするようなことがあっても、それぞれだよね、で済まされる気がします。二人が良ければいい、他人が立ち入れない世界というか。なので、関心が湧かない話題になってしまうかも。そう思いながらですが、書きます。

今思っても農家の長男というのは、本当に特殊です。小さい頃から親戚やご近所さんに後継ぎとして見られチヤホヤされて育っています。（親戚が集まって手土産の菓子折をどうぞと夫へ手渡したら、彼は一人で食べ始めました。そういう時は、黙って食べんと皆さんもどうぞってすすめるねんで！）親は、後を継いで欲しいという希望はあっても、直接ヤイヤイうるさく言ってへそを曲げられたら困るので遠巻きに見守るスタイル。言いたい文句も親の方が我慢しています。（その不満を私に言ってきて通訳させようとししないでください！）仕事以外のことはやらせないでご機嫌をとって育てたのかな？と思うことが度々あります。（家のことは全くやりません。用意された朝食を食べないとも言わずに仕事に没頭していることがあります。朝食を勝手に用意してるのはそっちや、という感じ！）後継ぎとしての重圧や、誰からも本音でぶつかってこられない寂しさみたいなものも意識することなく育ったかもしれません。（社会経験が少ないのである意味天然）

そこへやって来たのが、なんでも物申す大阪人の私ですから、家庭は大変な騒ぎです。みんなが教えてこなかったあれやこれやを子供に教えるように噛み砕いて説明する毎日。仕事の方は、私が教えてもらう側ですが、力のない女性に合わせて工夫するでもなく、俺はこれがやりやすいねん！スタイル（一緒に仕事していく気あるのかな？私がやる気無くしたら、己が損、わかってる？）夜の仕事が終わって、同じ時間に家に帰るも、私はまだ家事があります。お風呂も烏の行水で済ませ、急いでご飯の支度をしている、その時！！一緒に観ようって借りてきた映画のDVD、ご飯ができるまでの暇つぶしに、先に見始めたやないか…（ど、どういうこと？ 思いやりはどこやった！） 夫は時々、「何もしていないのに（私に）怒られた」と言っていました。家の仕事で育ち、両親が寛容だったため、マイペースや言葉足らずで問題が起きることを初めて知ったようです。私が辛かったのと同じだけ、彼も暗中模索だったと思います。私からの意見を途方に暮れたような顔をして聞いていました。私も小さいことでギャアギャア言いたくないのです、察してくださいよ！と心底思っていました。コミュニケーション経験がないから無理なんだ、とわかりました。育った環境が違う＝言語が違う異国人。そう頭の中を切り替え、お互いに相手の言葉を聴き取れるくらいにはなるう！と考えました。

例えば、大阪と北海道では「寒い」の感覚も違います。そのすり合わせにパーセントを使います。「今日は寒い度、何%？」それぞれの答えで相手の体感を測れます。力仕事に慣れている夫と、そうでない私とでは、疲れの度合いも違います。「やれやれ無事に仕事終わったね、お疲れ度、何%？」相手の答えにより、ねぎらいが自然発生したりします。仕事に関して意見交換していた時も、玄人の夫と新人の私では理解度が異なります。同じようにウンウンと聞いていても「今の意見、納得度、何%？」で確認しておけば、わかってくれてると思ったのに！全然わかってないやん！みたいなことが少ないです。細かいことは言わない、でも何割くらい伝わったかな？を感覚として知っておく。このパーセント方式は全感覚に使えます。

夫は夫で、1日の予定を連絡してくれるようになりました。私がどの情報を欲しいかまでは察せないなので、全部言っておけば足りないことはないだろう、と思ったようです。相変わらず家のことはあまりやりませんが、相当な仕事量をこなしていると知ってからは気にならなくなりました。就寝前に布団を温める乾燥機のスイッチは入れてくれます。寒くなってきた北海道、1日の終わりのホカホカ布団は至福なので、スイッチを入れるだけで最高のパフォーマンスです。片方が喜ぶことではなくて、両方が喜ぶことの作業を夫にやってもらうのが良いです。自分が動いて得た喜びを夫本人も実感できるから。相手の言わんとすることを前より聴き取れるようになり、今ではケンカが減った私たちですが、結論、相手の言葉は話せなくていいと思っています。普通はこうだろう！という決めつけや押しつけは不要。異国人のように全然違う発想や行動に驚きながらも否定はせず、そんな風に考えるんだ！大したもんだなあ！と 面白がっていくのが夫婦の醍醐味。まだまだ新発見を続けます。

夫のコミュニケーション経験値が増えてきたので、牧場スタッフさんの育成にも進歩が見られるようになりました。この話の続きは、またいつか。

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

